

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第47輯

三軒屋遺跡

空港連絡道路代替地造成事業に伴う発掘調査報告書

1989

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第47輯

三軒屋遺跡

空港連絡道路代替地造成事業に伴う発掘調査報告書

1989

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

泉佐野市沖に建設中の関西国際空港にとりつく空港連絡道路予定地の発掘調査もようやく本格的になってまいりました。ここに報告いたします三軒屋遺跡の発掘調査は、この連絡道路予定地内の住宅の立ち退きにもなう代替地の一つとして実施されたものです。今回の調査地は大阪府の文化財分布図に記載されている三軒屋遺跡の範囲からは北に隣接する地区であります。周辺遺跡の分布のようすから埋蔵文化財の包蔵地である可能性があったために大阪府教育委員会の指導のもとにまず試掘調査を行い、その結果遺跡の存在が確認されたことから、新たに三軒屋遺跡の範囲に含まれるものとして、本格的な発掘調査を実施したものです。調査範囲は比較的小規模で三軒屋遺跡の全体の性格を推し量るところまでには至りませんでした。それでも平安時代頃の黒色土器や土師器などのまとまった遺物などが発見され、これから三軒屋遺跡の内容を検討するための基礎的な資料になると思われ。今回の調査成果が当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土地開発公社、ならびに泉佐野市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成元年12月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 仁 賀 奈 祐 吉

例 言

- 1 本書は空港連絡道路代替地予定地内に所在する三軒屋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は大阪府土地開発公社の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
- 3 試掘調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師 奥 和之が担当し、平成元年5月に実施した。
- 4 第2次調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師 今村道雄が担当し、平成元年8月6日に現地調査を開始、平成元年10月31日に終了した。引き続き実施した整理事業は平成元年12月25日に終了した。
- 5 調査の実施にあたっては、泉佐野市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。
- 6 遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は資料班が担当した。
- 7 調査は当協会の発掘調査規程により国土座標系第VI系を基準に地区割りを設定して行った。本文中及び挿図で用いた座標もこれに従い、座標数値はkm単位で記した。方位は座標北を示す。標高はT.P.で表示した。
- 8 遺物には通し番号を付し、本文中の遺物番号は、遺物実測図番号、図版遺物番号と一致する。
- 9 文書で用いた土壌色、及び土器の色調は、小川正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖 5版』（1976）による。
- 10 本書の執筆、編集は今村が行った。

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の目的と方法	5
第4章 調査の成果	8
第1節 層序	8
第2節 遺構	13
第3節 遺物	15
まとめ	19

挿図目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 三軒屋遺跡と周辺の遺跡	3
第3図 調査地付近地形図	6
第4図 地区名図	7
第5図 東壁土層断面実測図	9～10
第6図 遺構平面実測図	11～12
第7図 遺構実測図	14
第8図 遺構実測図	15
第9図 遺構・包含層出土遺物実測図	16
第10図 遺構出土遺物実測図	17

表目次

第1表 遺構の種類と記号	5
第2表 1-00出土遺物数量一覧表	18

図版目次

図版一	遺構写真	上 全景（北）	下 全景（南）
図版二	遺構写真	上 段丘南端部（南）	下 16、17-00他近景（東）
図版三	遺構写真	上 第1次調査トレンチ（北）	下 ピット列1（西）
図版四	遺構写真	上 土層断面南端付近	下 土層断面
図版五	遺構写真	上 1-00近景 中 3-OP近景	下 19-OP近景
図版六	遺物写真	包含層出土土器	
図版七	遺物写真	包含層出土土器	
図版八	遺物写真	包含層出土土器・遺構出土土器	
図版九	遺物写真	遺構出土土器	
図版十	遺物写真	遺構出土土器	
図版十一	遺物写真	上 出土遺物集合写真	下 底部調整写真

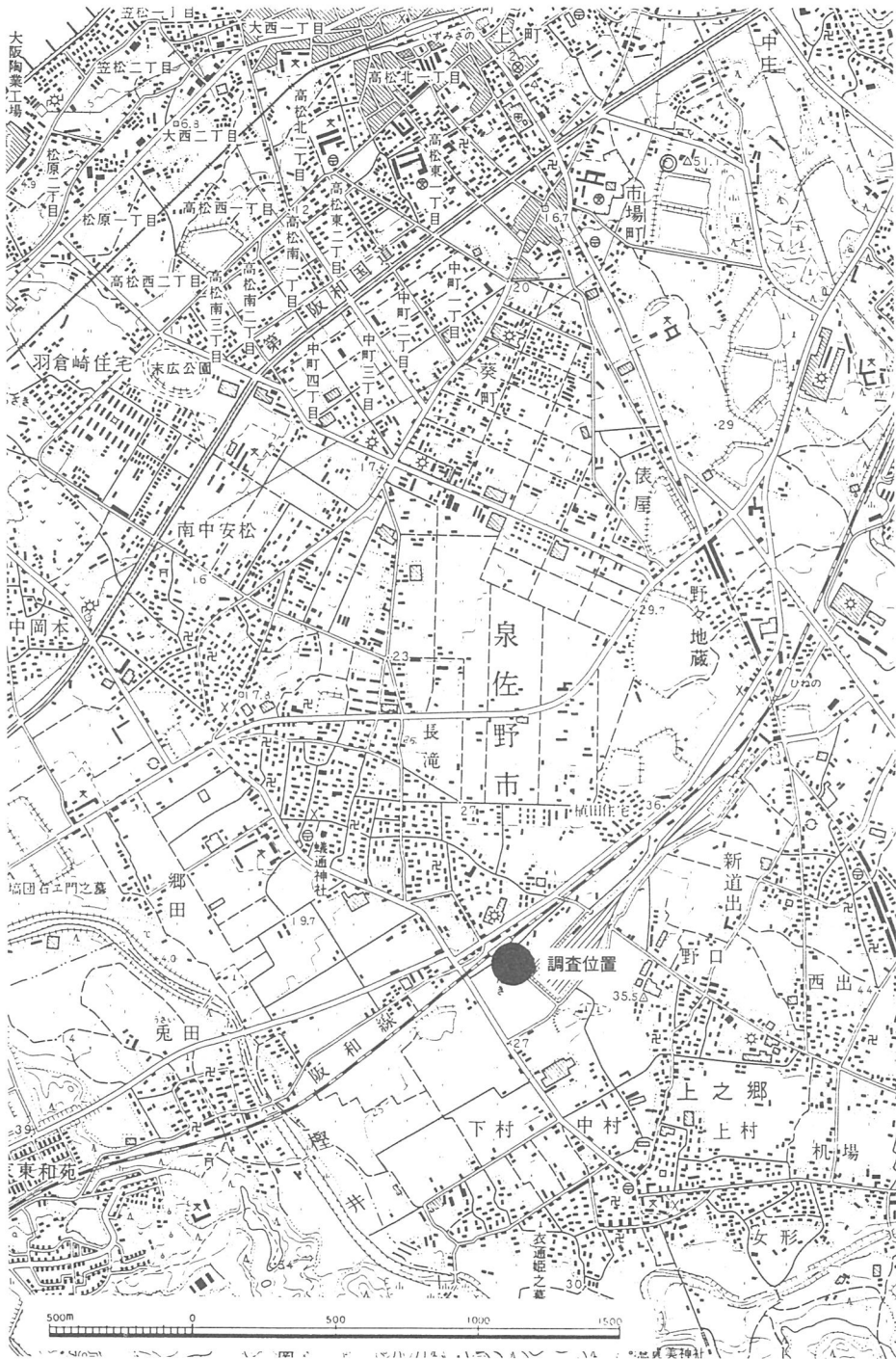
第1章 調査に至る経過

本遺跡の北東部に接する旧国鉄長滝駅構内の一部にある当調査区が国鉄清算事業団から大阪府土地開発公社に払い下げられ、その土地を空港連絡道路内立退き予定者に譲渡する計画が作成された。この後、大阪府教育委員会文化財保護課と大阪府土地開発公社との両者で協議が重ねられ、三軒屋遺跡が建設予定地内に拡がることが懸念されるに至った。協議の結果は、まず遺跡の拡がり調べることとなり、「三軒屋遺跡隣接地の試掘調査」を実施した。隣接地の調査（以下第1次調査と略する）は、当協会により、1989年5月から6月にかけて行われた。その結果、ピット等の遺構と多量の土器等の遺物、段丘端部の一部を確認し、三軒屋遺跡が当地区にまでのびることが明らかになった。この調査成果をもとに再度府教育委員会と大阪府土地開発公社の間で協議を行い、当協会が府教育委員会の指導のもとに三軒屋遺跡発掘調査（以下第2次調査と称する）を実施する運びとなった。当協会は、大阪府土地開発公社と1989年8月1日に委託契約を締結し、8月7日に調査工事請負業者（株）南大阪建設と請負契約を結び、8月15日に着工し、10月31日にすべての調査を終了した。なお調査によって検出した遺構は、保存を計るため砂によって遺構表面を覆った後埋戻している。

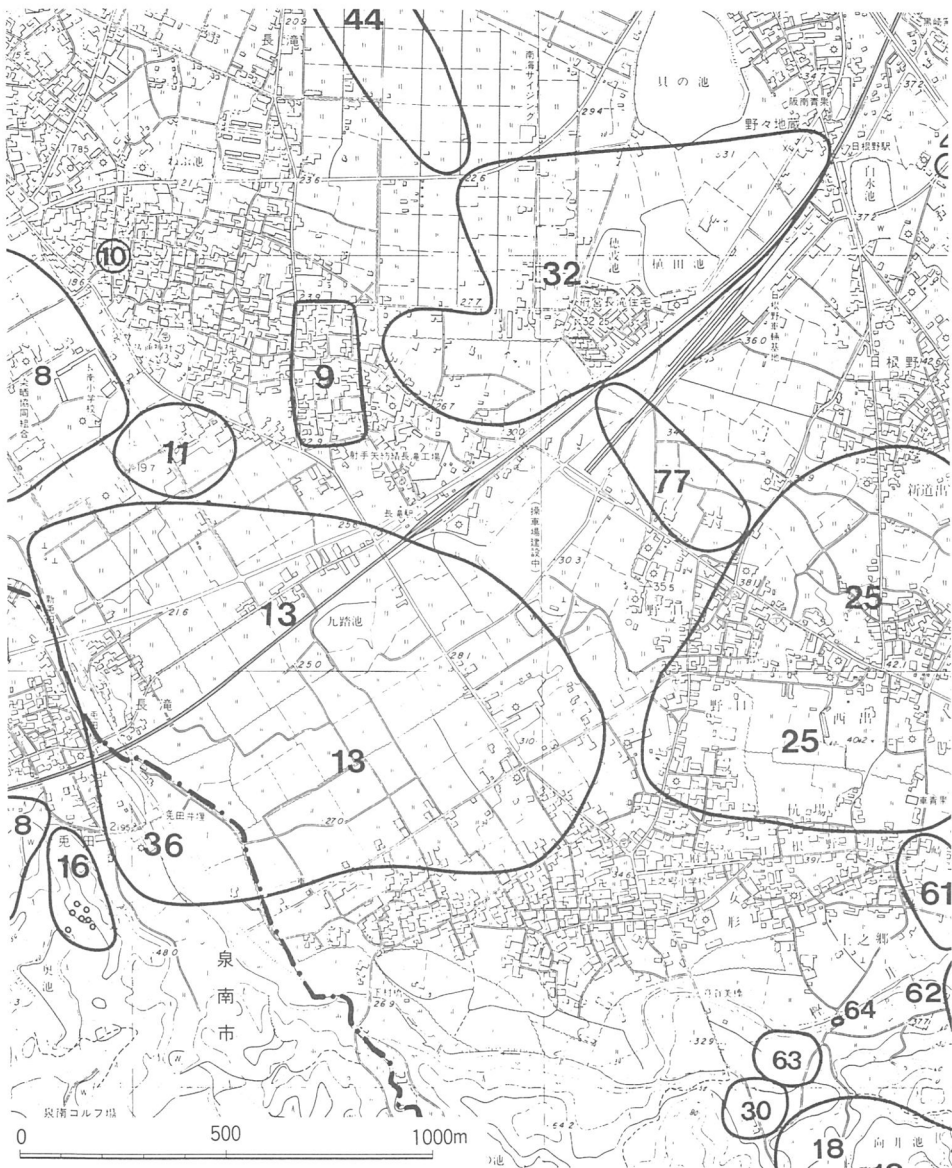
遺物整理と一部の内業作業については現地調査と平行して行ったが、大半の整理作業は現地調査が終了したのち、当協会泉大津調査事務所にて土器洗浄、注記、復元、実測、拓本、台帳作成、写真撮影等の諸作業を実施した。そして、本事業は、1989年12月25日に「三軒屋遺跡」の刊行をもって終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

本調査区は三軒屋遺跡の中でも最も高所に位置し、標高はT.P.+28.00mを測る。調査地の南側には、比高約2～3mの段丘崖が樫井川と平行に走っている。これまでの三軒屋遺跡の発掘調査は例外なく、段丘下の平坦面＝氾濫原を中心に進め、多くの成果を上げてきた。これまでの段丘下の調査成果には、縄文時代後晩期、弥生時代、古墳時代、中世以降の実に多くの遺構、遺物が確認されている。反面、段丘上に調査の手が及んだことは、皆無に近い状態であった。



第1図 調査地位置図



泉佐野市

泉南市

- | | | | |
|------------|--------------|----------|------------|
| 8 諸目遺跡 | 18 向井池遺跡 | 61 机場遺跡 | 8 フキアゲ山東遺跡 |
| 9 禪興寺跡 | 25 日根野遺跡 | 62 棚原遺跡 | 16 兎田古墳群 |
| 10 城の塚古墳 | 30 重文 意賀神社本殿 | 63 向井代遺跡 | 36 三軒屋遺跡 |
| 11 ダイジョウ寺跡 | 32 植田池遺跡 | 64 上之郷牛神 | |
| 13 三軒屋遺跡 | 44 長滝遺跡 | 77 郷之芝遺跡 | |

第2図 三軒屋遺跡と周辺の遺跡

また、当地域の遺跡の様相は、泉佐野市教育委員会の手によって徐々に解明されつつあるが、本遺跡に限っても、豊富な調査例に比して不明な点もまだ多く、漠然と縄文時代から中世にかけての遺跡であることとしかわかっていない。しかし近年、遺構、遺物に恵まれた調査も行われており、それらの一刻も早い遺物整理や調査報告書の刊行が待たれる状況である。

今回の発掘調査は、三軒屋遺跡の全体像を知る上で、どのような遺構が検出されるのか、遺物が得られるのか注意して行われることになった。第2次調査にあたっては第1次調査の成果を元に、粘土層～礫層の各土層上面が遺構面になり、さらにその下には下層の遺構、遺物の存在している可能性等々についても、いろいろな検討すべき事項は残されていた。遺物については第1次調査で出土した土器の中に、底部系切底の黒色土器、土師器小皿、碗、皿類が出土している。これらの土器が第2次調査でどのような状態で出土するのか、出土量や供伴関係、種類、時期等について、あるいは土器生産、消費、流通等の問題を解決する新たな資料の発見の可能性が大いにあった。特に、今回の調査は10. 11世紀頃の底部系切底の土器の分布状況の比較、後世の土器との対比、他地域との地理的、時間的関係の究明に大きく寄与するものと考えられた。

この地域の歴史を概観するには、昭和33年5月発行（昭和55年12月復刻）の『泉佐野市史』がある。考古資料の記載、古代の分野の記述は少ないが貴重な概説書である。

周辺の遺跡には、第2図に明示したように17遺跡があるが、日根野、郷之芝植田池、長滝、機場遺跡等に限らず多くの遺跡の詳細な内容に不明なものも多く近時の発掘調査で成果が得られることが期待されている。

奈良時代以前の泉州地域は、河内国の一部に含まれて、大鳥、和泉、日根群の三郡が設置されていたと考えられている。長滝駅付近は、日根郡に当り、同郡は近義、賀美、呼叻、鳥取の四郷からなり、このうちの賀美郷に属する地域であった。和泉国は、霊亀二年（716年）に河内国から分離し、和泉監が置かれ、国に準ずる扱いとなった。この経緯については定かでないが、茅渟宮の存在が大きなウェートを占めていたのであろう。茅渟宮は、続日本紀の霊亀二年（716年）三月の条、天平十六年（744年）七月、十月の元幸天皇の行幸の記録の他に、和泉監設置の翌月国印に準じて監印が授けられたこと、史生三人が置かれたことなど、一国としての取扱いを受けたことが文献に記されている。今日、茅渟宮の位置は、泉佐野市史によれば、日根郡上ノ郷付近に比定されている。行政的に和泉国が設置されるのは、天平宝字元年（757年）で、この年をもって名実共に五畿内の一国に

あげられるようになった。

第3章 調査の目的と方法

調査の目的

三軒屋遺跡は、大阪府教育委員会、泉佐野市教育委員会のこれまでの調査によれば、縄文時代～奈良時代の多種多様な遺構、遺物が検出されており、各期の大集落跡と予想されている。本調査地点は、遺跡の北外縁の隣接部にあたるが、第1次調査により平安時代の遺構、遺物が広がっていることが確認されており、今調査はその時代の遺構検出と遺物の採集と整理を行うのが目的である。

調査の方法

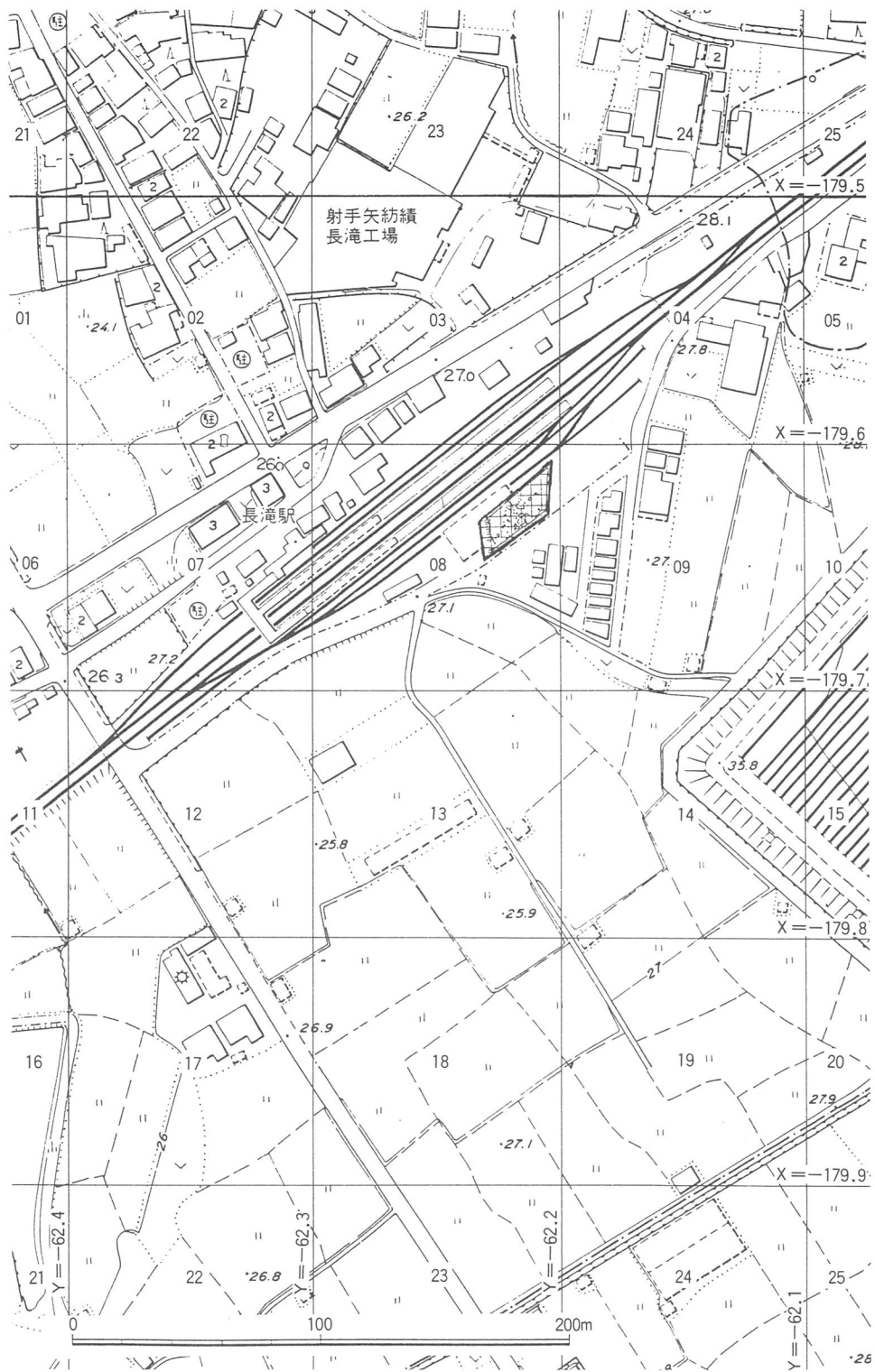
遺構の記録、遺物の取上げには、国土座標法による建設省規定第Ⅵ座標系と大阪府作成のS=1/2500地形図をもとに、協会固有の地区名称を3段階で割付している。ちなみに、1/2500地形図一葉を500m方眼に12分割し、A～Lの地区名をつけ、さらに、その中を100m方眼に25分割し、1～25の地区名を与え、最後に100m方眼の中を4m方眼に縦横25等分した625区画にA～Yの名称を組合わせて使用した。(第3、4図)調査区の地区名は第4図XB～XF、RG～GJで、発掘調査区は、南北約30m強、東西10数mの平行四辺形で面積は約430㎡である。

遺構記号

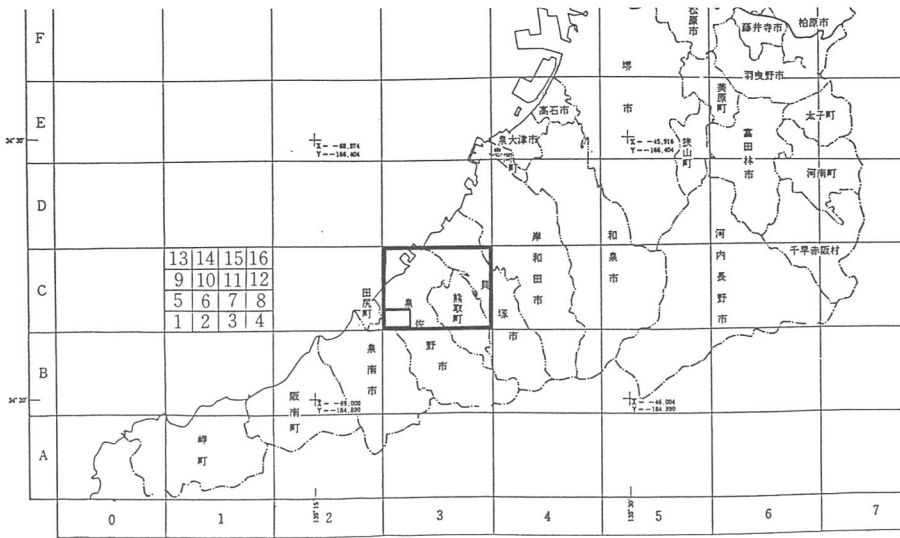
本書では、遺構の記号について協会作成による下記の特有な遺構記号によっている。

第1表 遺構の種類と記号

道路	OA	溝	OS
建物	OB	土器溜・瓦溜	OT
竪穴住居	OD	井戸	OW
土塁・石塁	OE	苑池	OY
柵・塀	OF	水田・畑	OZ
炉	OH	祭祀	OC
水利施設	OI	窯	OK
土坑	OO	池・沼	OL
ピット	OP	埋葬施設	OU
河川	OR	その他・不明	OX



第3図 調査地付近地形図



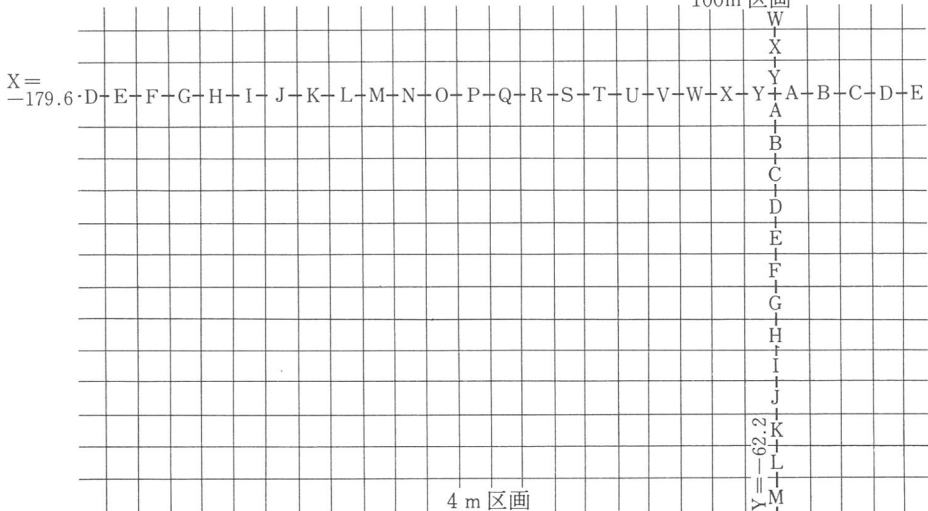
大阪府1/2500地形図

A	B	C	D
E	F	G	H
I	J	K	L

500m 区画

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

100m 区画



4 m 区画

第4図 地区名図

第4章 調査の成果

第1節 層序

本調査地区は、段丘南端部に位置し地表面の高さは、T.P.+28m前後、段丘下でT.P.+26mを測り、比高差は約2.0mである。調査においては、遺構面下にもトレンチを設定し、段丘礫層までの層位を確認すると共に各層の観察、遺構・遺物の検出に努めたが、検出されなかった。

第I層 現代堆積層である。

第5図の1・3・9・12が相当する。厚さ40～70cmに及ぶアスファルト、碎石と厚さ0～10cm余の旧耕土、厚さ0～20cm余の床土の可能性の大きい土層からなる。旧耕土は灰白色粘質土(N7/10)で、床土とおぼしき土層は灰白色粘質土(5Y7/2)である。いずれの層からも遺物は出土していない。

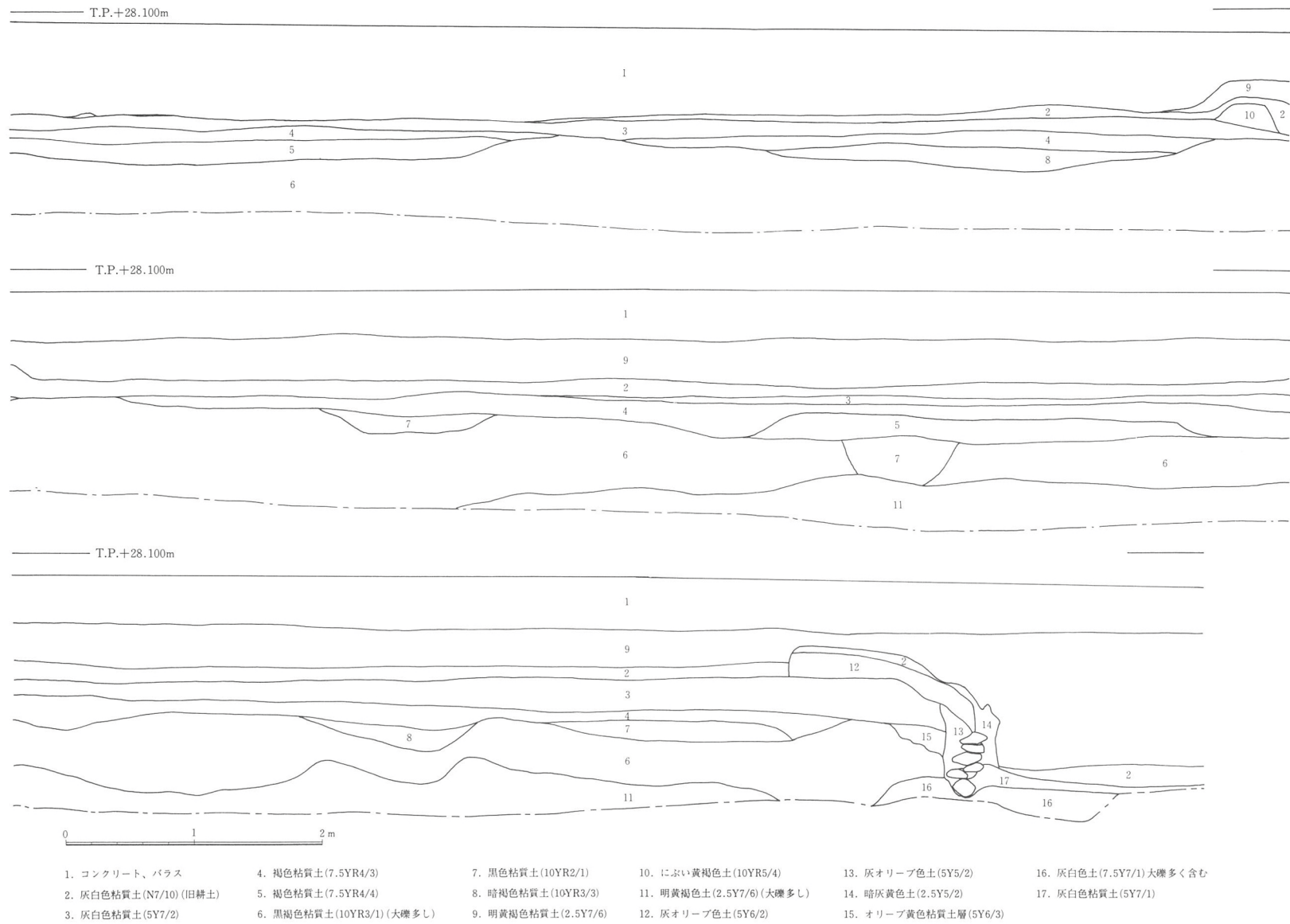
第II層 古代の堆積層である。

第5図の中の4・5・8層の3層が対応する。4・5層は遺物包含層、8層は遺構埋土である。4・5層は、厚さ10～30cmの褐色粘質土(7.5YR4/3)で、土中に少量の炭片と細かい焼土ブロックと土器片を含むが量は少ない。8層は、深さ10～20cm、浅い皿状の遺構の可能性もある落込の埋土とみられる。暗褐色粘質土(10YR3/3)である。

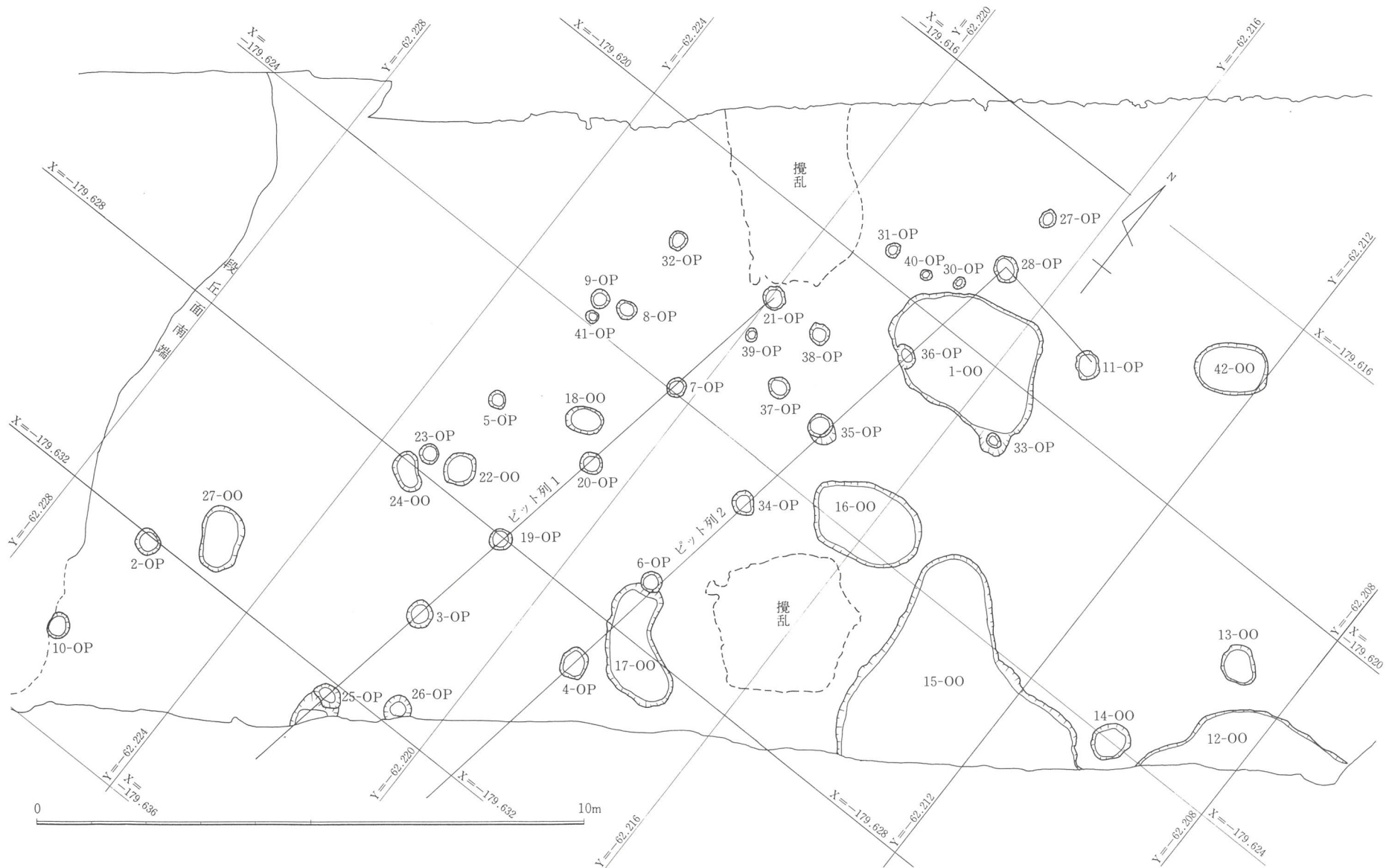
第III層 本調査における地山層である。

第5図の6・7・11・16が地山層に相当する。6層は、厚さ20～70cm以上ある黒褐色粘質土(10YR3/1)内に20～40cmの円礫を多く含み、層の上下面は大きく波うっている。その下の11層は、大きな円礫を多量に含む明黄褐色土(2.5Y7/6)層で、6・11層の各層間の上下動は激しい。なお、6層の上面の処々にみられる7層の黒色粘質土(10YR2/1)は一見しただけでは遺構埋土の可能性もあるためトレンチを設定して遺構の存在有無を確認したが、遺構とは認められなかった。

以上のように調査区の土層を大別すれば、第I～III層に区分ができ、遺構、遺物を検出した土層は第II層であることは先に記した通りで、遺構の埋没深度はGL-90～110cm、



第5図 東壁土層断面実測図



第6図 遺構平面実測図

T.P.+27m前後である。

第2節 遺構

奈良時代～平安時代

今回の調査で検出した遺構の検出範囲は、包含層が割合良く残っていた地区で、かつ粘質土の部分である。大小の礫が露出していた地区には、遺構は認められなかった。

遺構面の高さは、T.P.+26.80～+27.10mを測り、北側の標高がわずかながら高い。主要な遺構は、平安時代中頃の土坑、ピット列であり、他に同時代ないしはほぼ同時期と思われる柱穴が散在する。第II層すなわち4.5層からは第9図（1～50）の遺物が出土している。第III層上面の遺構の前後関係は、出土遺物から判断して15-00の遺構が古くなり、ピット列1・2、1-00の遺構が新しくなる。上限の時期に属する遺構は、埋土の類似から12-00の遺構をあげることができる。また、土坑、ピットの埋土の状況から類推して、大半の遺構を下限の時期と見ることができる。

15-00 調査区東側北寄りで検出した。遺構の全容は不明であるが、調査区内に4.0×4.5mの不定形なプランをとどめ、浅く平坦な底の土坑である。埋土は暗褐色土である。遺物は、坑底に密着した状態で出土した須恵器（第10図-91.92.93）がある。

12-00 15-00の北約4mのWF区にある。規模は、長さ約3m、幅1m、深さ10数cmで不定形なプランの土坑の一部である。土坑の埋土は、15-00と同じ暗褐色土である。遺物は出土していない。

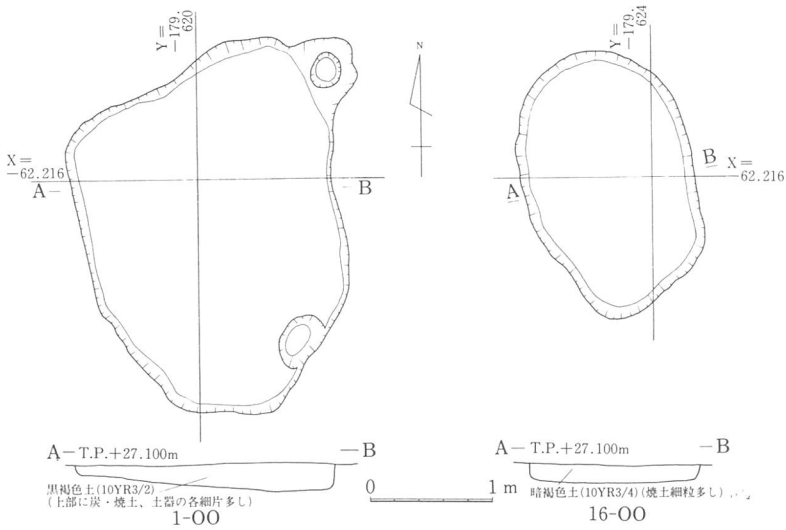
1-00 UF区などに広がる南北約2m余、東西約2m余、深さ約20cmの不定形なプランの土坑である。土坑の埋土上部及び周辺には、焼土の粒片、炭片、土器片等の出土量の多いことが注目される。埋土は黒褐色土（10YR3/2）で埋土除去後に23、36-OPを検出した。

ピット列1 一列に並ぶピットを6ヶ所確認できた。ピットは、北から順に、21、7、20、19、3、25-OPに連なる。ピットの形状は、不ぞろいな隅丸方形のプランに、深さ20～30cmを測る。2.4～2.0m間隔で並び、南へ伸びる。ピットの埋土は炭を多く含む。

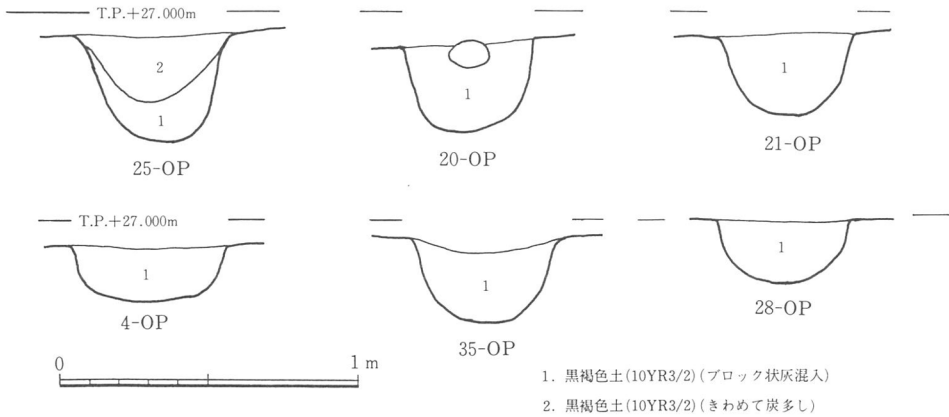
ピット列2 北からピット28、36、35、34、6、4と東へ11が直角に曲がるピット列である。ピットのプランは、不整な平面形で、深さ10数cm～20数cmの比較的浅いピットである。ピット間隔は2.0～2.4mを計測する。ピットの埋土は、黒褐色土である。なお、遺構

の切合いがある1-00と17-00は1-00がピット列2より新しく、17-00はピット列2より古い関係にある。ピット列1、2のピットにいずれも柱根の痕跡はなかった。なお、ピット列1、2の方位は、 $N-9^{\circ} 0' 25''-E$ と $N-9^{\circ}-E$ で、方位の差は小さい。

ピット列1・2の他にも多くのピットを検出したがいずれも組み合わせるものはみられなかった。また、16、17、27-00の他に多くの土坑があるが、浅い皿状の断面をしたものがほとんどであり、土坑からの出土遺物は、1、15、27-00以外は皆無である。



第7図 遺構実測図



- 1. 黒褐色土(10YR3/2)(ブロック状灰混入)
- 2. 黒褐色土(10YR3/2)(きわめて炭多し)

第8図 遺構実測図

第3節 遺物

出土遺物は第9・10図-1～90に示したような土師器、黒色土器、須恵器等がある。

遺構出土土器は第9・10図(47～90)である。このうち、(52～59)土師器皿・椀の破片は器種の区別が十分できないため、とりあえず皿・椀類としておきたい。

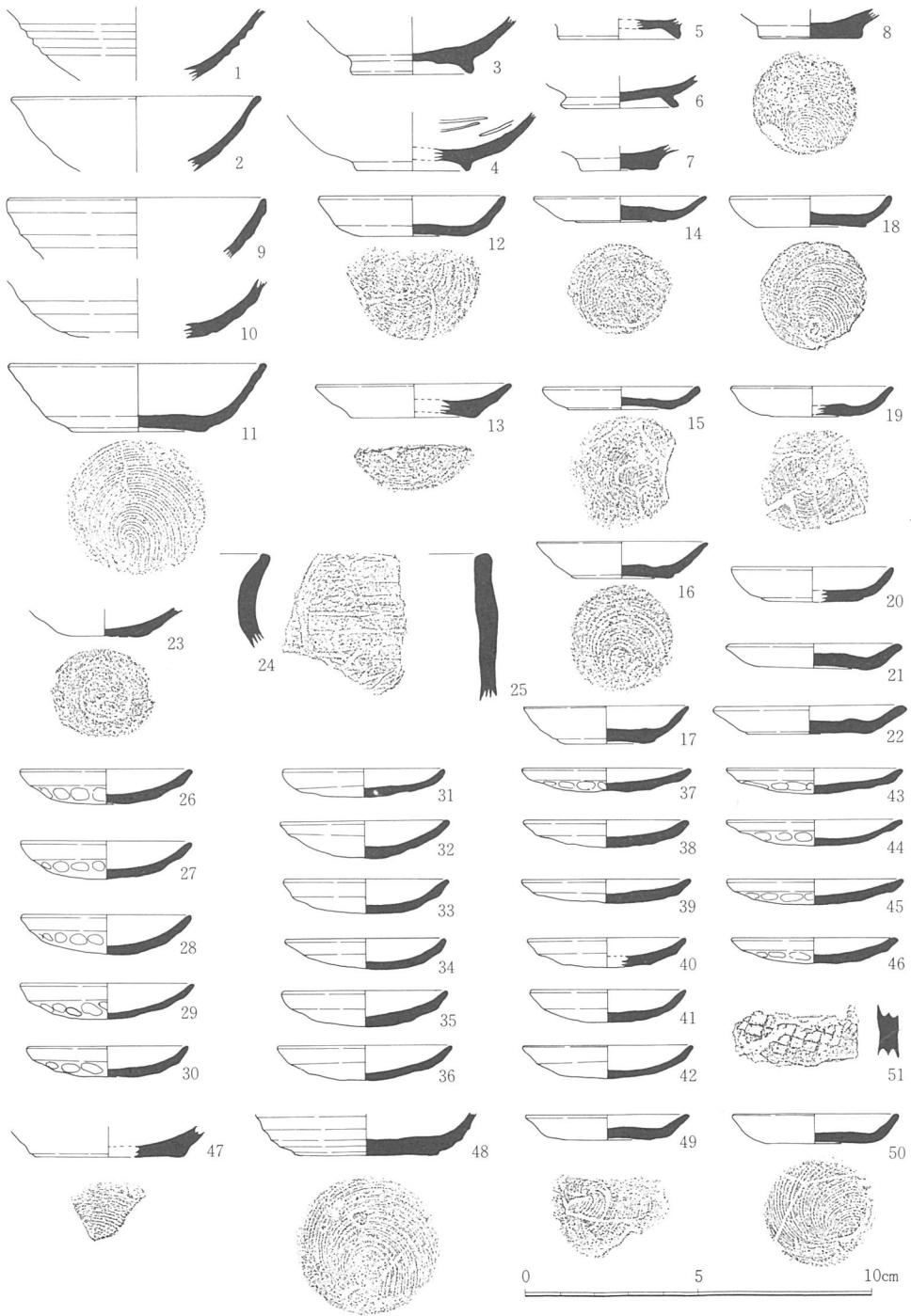
(52・53)は口径14cm、54は口径18cmを測る。(53・54)のナデには強い特徴があり、これまで大阪府下では報告事例のない土器である。近県の類例の一つに和歌山県野田・藤並遺跡出土土器などがあげられる。(55～59)は、皿、椀類の底部である。径は、9.6cm～7.2cmを測り、底部には回転系切りの痕跡(56～59)を残す。底部外面は、強いナデを施すもの(55)と弱いもの(56)がある。(57～59)の内外面はナデ仕上げしているが、(57)は内面に極めて強いナデ痕を残し、(58・59)は円盤状の底部になる。

(60)は中皿で口径11.2cm、器高2.5cm、底径6.6cmを測る。体部外面は強いナデ、内面はナデ、底部は回転系切りで小さい段がつく。(61～66)は、口径8.6～10.4cm、器高1.3～1.8cm、底径1.3～7.0cmを測る小皿である。底部はすべて回転系切りである。口縁～体部内外面はナデている。なお、これらの小皿は大変バラエティーに富み、各部の寸法、形状の変化が多いのが特色である。整理復元の結果、低平な器高で小さく外反する口縁のもの(61・62)、より強く外反する最も高い器高の一群(63)、口径も大きく、部厚い器壁で外反ぎみににぶくおさまるもの(64・65)の3グループに大別できる。なお、これらの土師器の内外面の保存状態はあまりよくない。

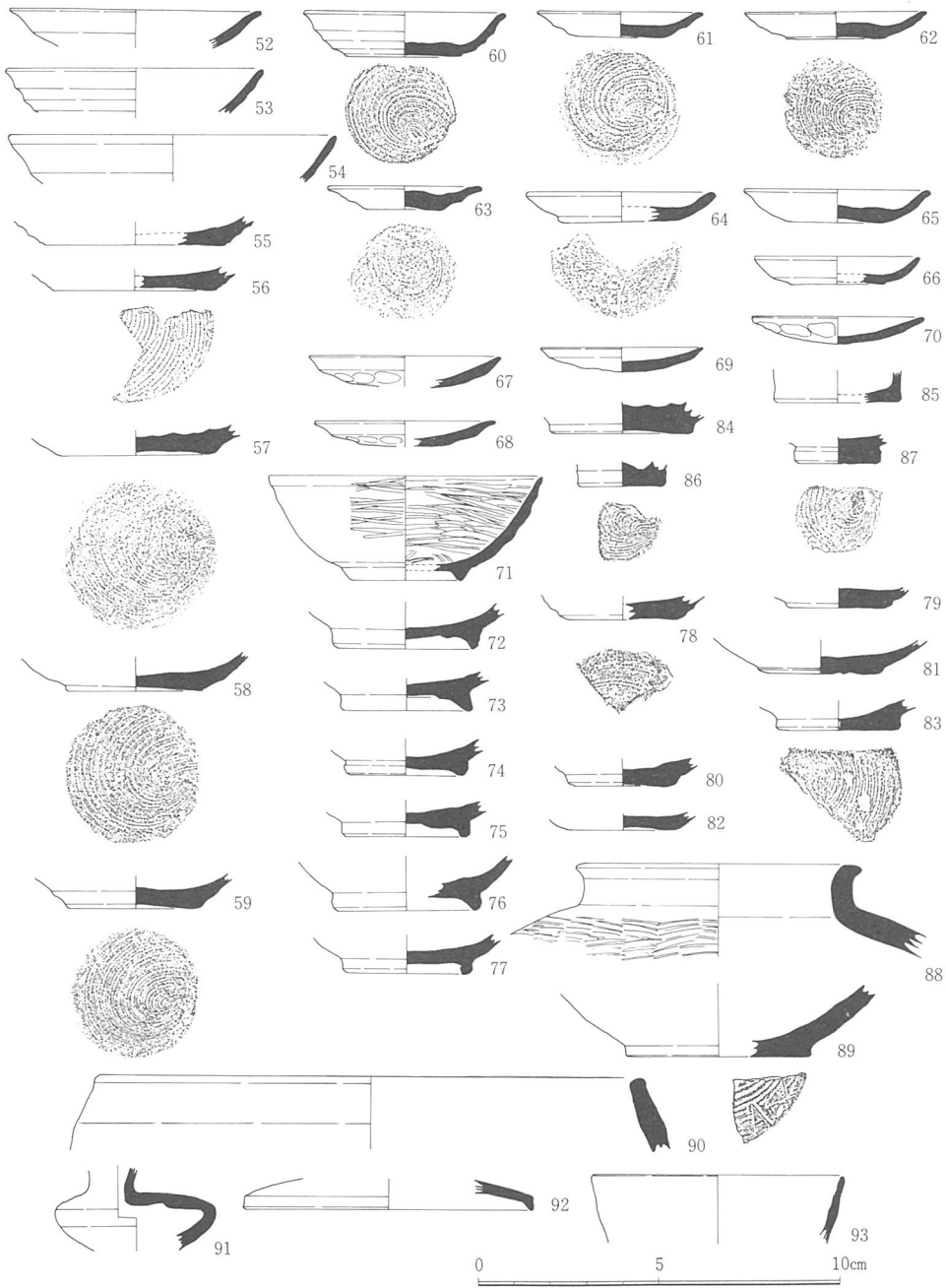
(67～70)は、口径9.0～10.5cm、器高1.4～1.7cmの土師器小皿である。体部下半には指頭圧痕がある(67・68・70)が、(69)はかすかである。口縁部外面にはナデを施す。

(68)は、ナデが強くいわゆる「て」の字状口縁の土器に近い。

(71～83)は、黒色土器である。全形を知り得る椀は1点(71)である。寸法は口径15.2cm、器高5.7cm、底径6.1cmで内弯ぎみに外傾する体部の内外面と底部内面は、ナデの上にヘラミガキを粗く施している。口縁外面直下のヨコナデはやや強い。胎土、焼成は密、良好で色調は外面が灰白色、内面は灰色(N4/0)である。黒色土器のうち貼り付け高台は(71～77)、底部円盤のものは(78～81・83)で、(78・79・80・83)は底部に系切り痕が明瞭に残っている。内外面のヘラミガキの保存状態が良くないなかであって、(71)には内面にヘラミガキがかすかに残っている。なお、黒色土器A類は、(71～76・78～81・83)、B類は(77・82)である。また貼り付け高台の底径は、6.6～8.2cm、円盤底の底径



第9図 遺構・包含層出土遺物実測図



第10図 遺構出土遺物実測図

第2表 1-00出土遺物数量一覧表

器種		出土遺構	1-00
黒色土器	椀	A	37
		B	0
	皿(碗)		6
	鉢		1
	他		1
小計			45
須恵器	杯		2
	カメ		2
	鉢		1
	他		1
	小計		6
土師器	椀		4
	大皿		36
	中皿		0
	小皿		123
	他		4
	カメ		11
	小計		178
	区分不明破片数		427
合計			418
備考			

外面が灰色、内面は灰色(N4/0)を呈し、胎土中の砂粒はあまり認められない。焼成は良好なものが多い。

(88)は、口径14cmで器壁の厚い胎土に白色砂粒を少し含む焼成良好な土師質の甕である。大きく張る体部に短い頸部と小さく外反する口縁部をもつ。体部外面には横位の粗いタタキがつき、内面にはハケ目がつく。頸～口縁部内外面はナデている。(89)は、底径13.2cm、胎土、焼成は密で良好な灰色の須恵器鉢である。底径は13.2cm、厚さ0.9cmの破片で体部は外上方にのびる。内外面はナデ、底部は回転系切り痕を残している。(90)は、口径29.8cm、色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好な土師器の口縁端部破片である。器種は類例に乏しく不明である。内外面はナデている。以上が1-00出土遺物である。

15-00の出土遺物は、(91~93)の須恵器平瓶、杯蓋、杯である。胎土、焼成はいずれも良好で、色調は、灰色～灰オリーブ色をしている。(91)の体部は、径8.9cm、(92)の口径は15.9cm、(93)の口径は14.0cmである。ピットから出土した遺物は、第9図(47~51)である。(47・50)は3-OP、(48)は4-OP、(49)は11-OP、(51)は6-OPから出土した土師器の大皿・小皿・斜格子叩きのついた破片等である。

含包層出土の土器は、第9図、(1~46)である。(1)は、体部に強いナデのある土師器椀で、泉南地域では数少ない例で、今後の資料増加が期待される。(2~8)は黒色土器椀A(2~5・7)、B(6・8)で、底部回転系切り痕は(7・8)に残っている。(4)の内面には暗文が残るが、それ以外は土器表面

の保存痕度が良くないため、不明瞭である。土師器碗（9～11）のうち、（9・10）の体部には強いナデがある。（11）の底部は、回転糸切り、体部は内外面とも整美なナデが残る。口縁端部は丸く内側に小さくふくらみ、体部はゆるく内・外に弯曲する。（12・13）は底部糸切りの土師器中皿である。（14～22）は土師器小皿で、いずれも底部糸切りである。各小皿の口縁、器高等の寸法はバラエティーに富むのが指摘できる。体部内外面と底部内面はナデで仕上げている。（23）の土師器小皿の底部にはヘラ切り痕が残る。（24・25）は、土師器の羽釜（24）と甕の口縁端部（25）である。（26～46）は、口径10cm内外、器高1.4～2.0cmを測る底部指オサエの土師器小皿である。口縁内外面にはナデが残り、底部外面は指オサエが残る。器高が低く、内面が平滑で浅い（37・38・43～46）は、口縁のナデは小さいが、指オサエは強い。口縁内面に沈線状の線が残るものもある。器高が2cm近くもある（26～36・39）は、深い小皿で、口縁ナデ幅が少し狭いものの、指オサエは強い。（40～42）の器高は、先の（26～36・39）等の群とほぼ同じで深い、口径はやや小さい。外面底部調整は、指オサエの上からナデ、かなり平滑に仕上げている一群である。

まとめ

今調査で得た成果は、先に記したように非常に多大なものである。以下、簡単にまとめておきたい。

- 1、当地域の開発が進展した時期は、出土遺物から、奈良時代の一時期と、やや時を経た平安時代中葉のようである。
- 2、遺構、遺物の出土土層は、粘質土層中上面であり礫層露出部分には認められなかった。この差が何に起因するのかは、今回の調査成果からは推測の域を越えることはできなかった。また、検出遺構の堀形の深さは割合浅く、後世に削平されたものと考えられる。
- 3、出土遺物のうち、遺構1-00出土遺物の分類は、第2表のとおりである。この中で黒色土器A・B類は45点のうち、底部糸切りのものが、A類3点、B類2点ある。この数字は、黒色土器全体の11.1%、底部18点に対して27.8%を占める。さらに、底部の形状は、いわゆる円盤状底部と表現した方が適切な、突出した底部である。貼り付け高台と円盤状底部の比率はほぼ同数である。
- 4、第2表土師器小皿123点のうち、底部糸切り小皿97点、78.9%、底部指おさえ小皿23点、18.7%、「て」の字状口縁小皿3点、2.3%である。この中で、底部糸切り小皿は、前に述べたように口径、器高、形状、調整等にバラエティーが大変多いのが特徴である。

- 5、泉南地域でのまとまった底部系切底の出土例は、今回が初めてであるが近接地域では、和歌山県北部地域の出土例が良く知られている。渋谷高秀「野田・藤並地区発掘調査報告書」によれば、土器器底部系切りの和歌山県北部での出現時期を11世紀中頃と指摘している。本遺跡での底部系切りの土器や、回転ナデの痕跡のある椀・皿片等の他に、「野田、藤並地区」ではみられなかった黒色土器底部の系切り痕が、本遺跡では顕著に見られる点が重要である。
- 6、本調査で検出した遺構、遺物の時期について、一部は奈良時代であるが、大半の遺構、遺物の時期の上限は、黒色土器の存在等から10世紀中頃に、下限は瓦器の不在等をもとに11世紀前半頃に求めて、10世紀後半を中心とする年代を考えておきたい。

発掘調査時、遺物整理等に関して下記の方々より種々御教示いただいた。記して感謝する（敬称略）。

橋本久和、鈴木陽一、重金 誠、仮屋喜一郎、佐伯和也、森村健一、岡本敏行、渋谷高秀

参考文献

- 伊野近富 「円波・篠窯の終焉」（『中近世土器の基礎研究』Ⅱ、日本中世土器研究会） 1987
- 岡崎研一他「考察 遺物」（『京都府遺跡調査報告書』 第11冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）
- 渋谷高秀他『野田、藤並地区発掘調査報告書』 和歌山県教育委員会 1984
- 森 隆 「近江地域出土の古代末期土器群について」（『中世土器の基礎研究』Ⅳ） 日本中世土器研究会 1988、11

圖 版



全景 (北)



全景 (南)



段丘南端部 (南)



16、17-00他近景 (東)



第1次調査トレンチ (北)



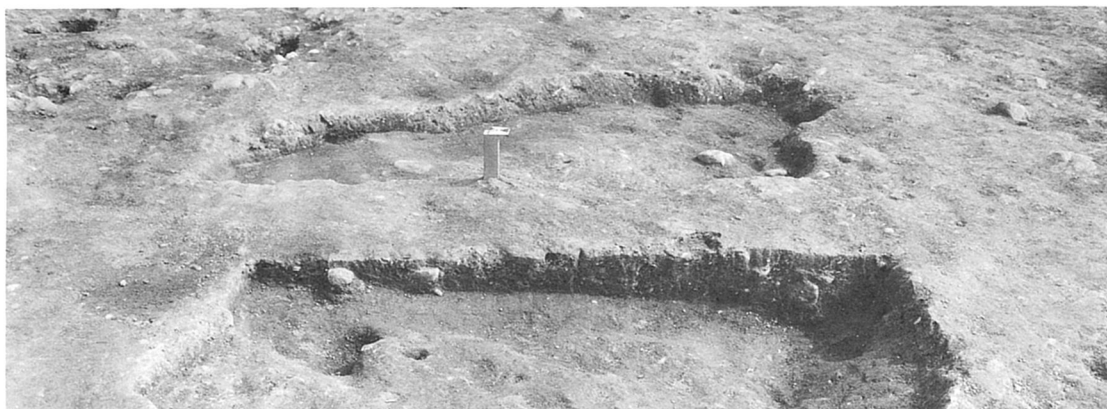
ピット列1 (西)



土層断面南端付近



土層断面



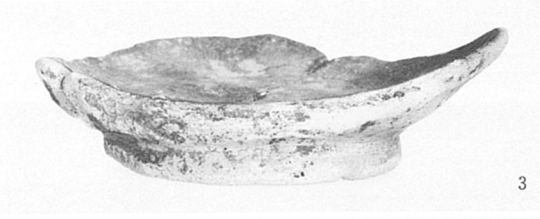
1-00近景



3-0P近景



19-0P近景



3



16



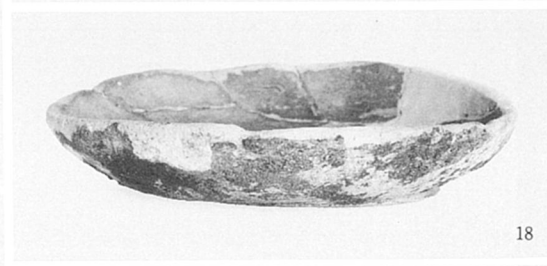
11



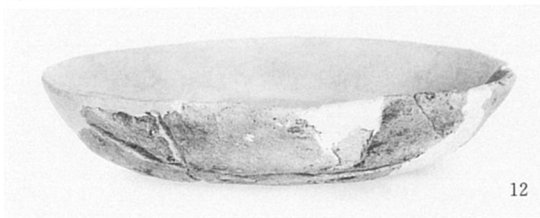
16



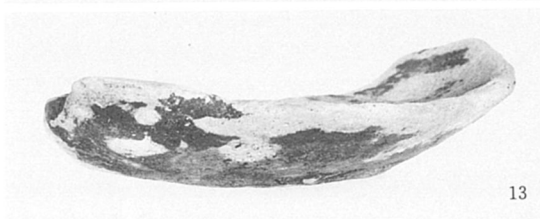
11



18



12



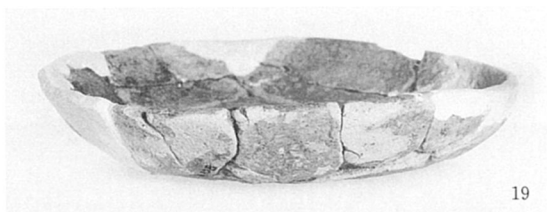
13



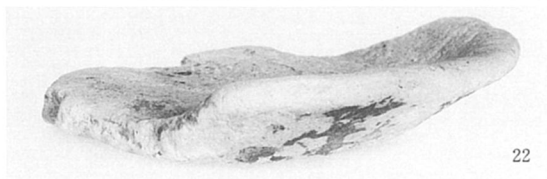
18



14



19



22



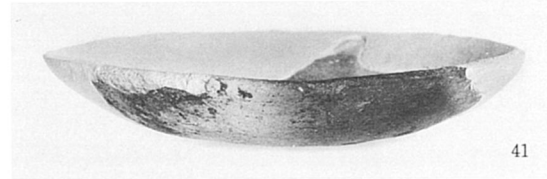
23



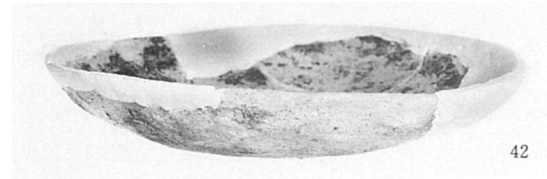
31



36



41



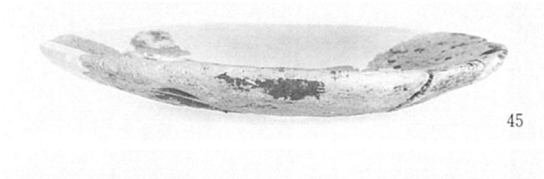
42



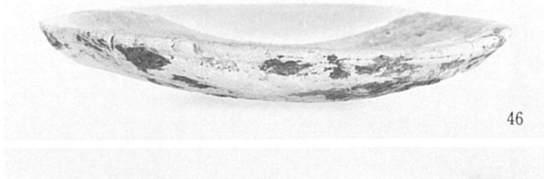
43



44



45



46



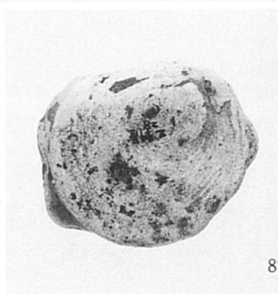
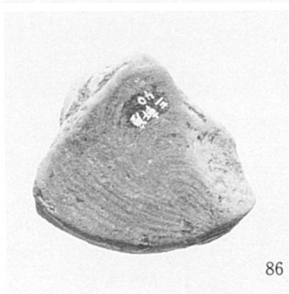
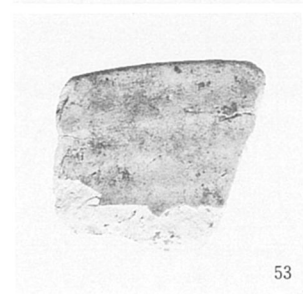
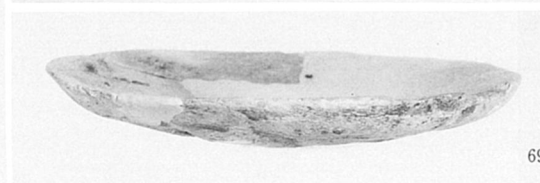
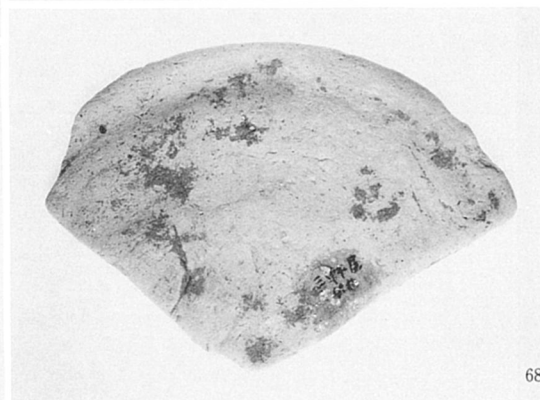
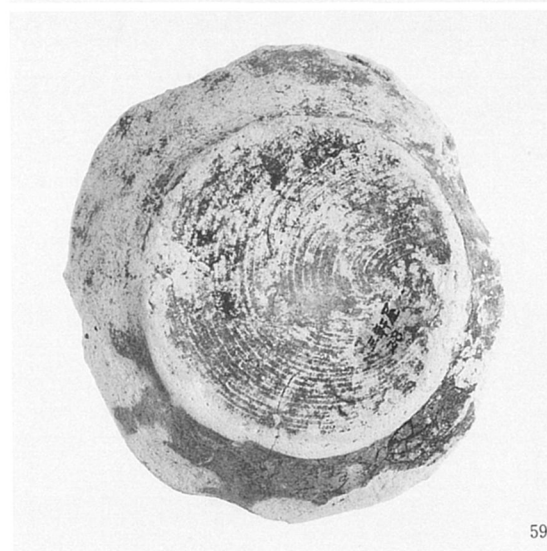
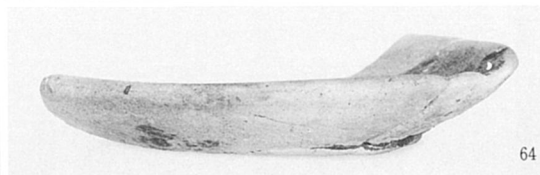
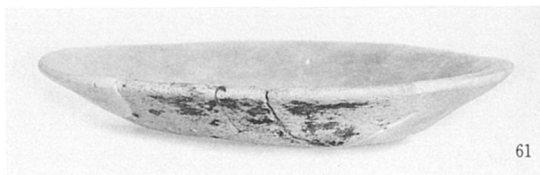
48

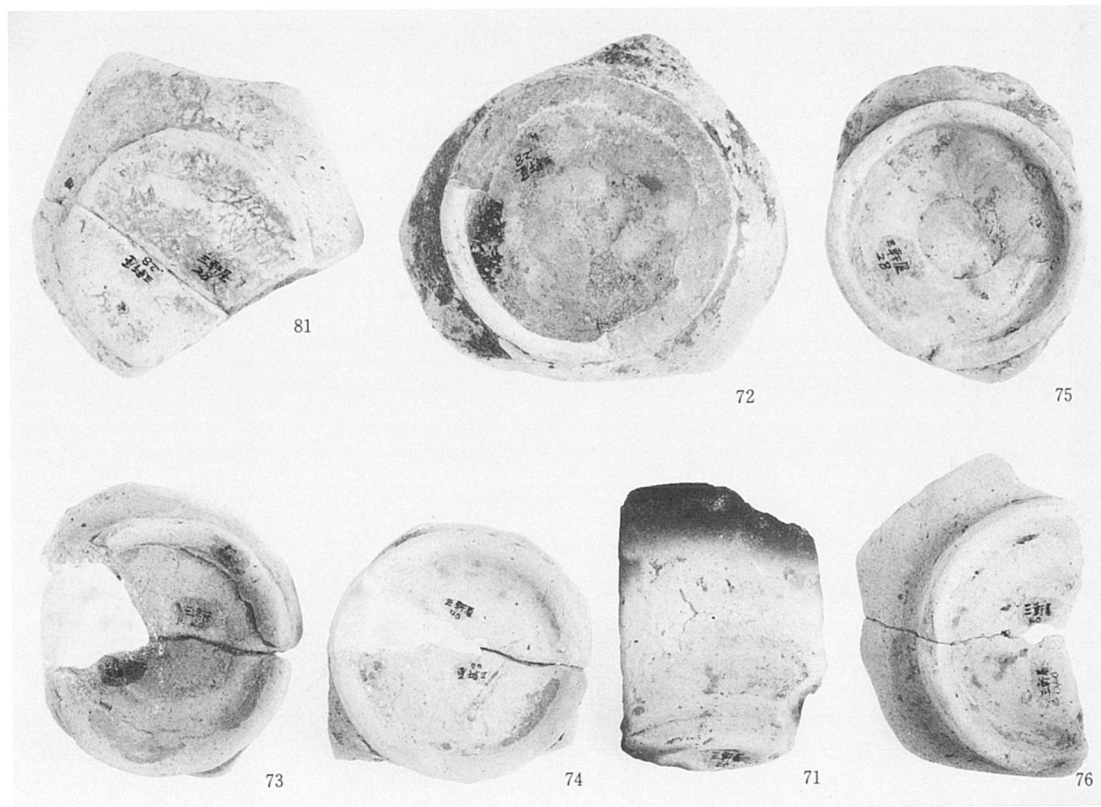
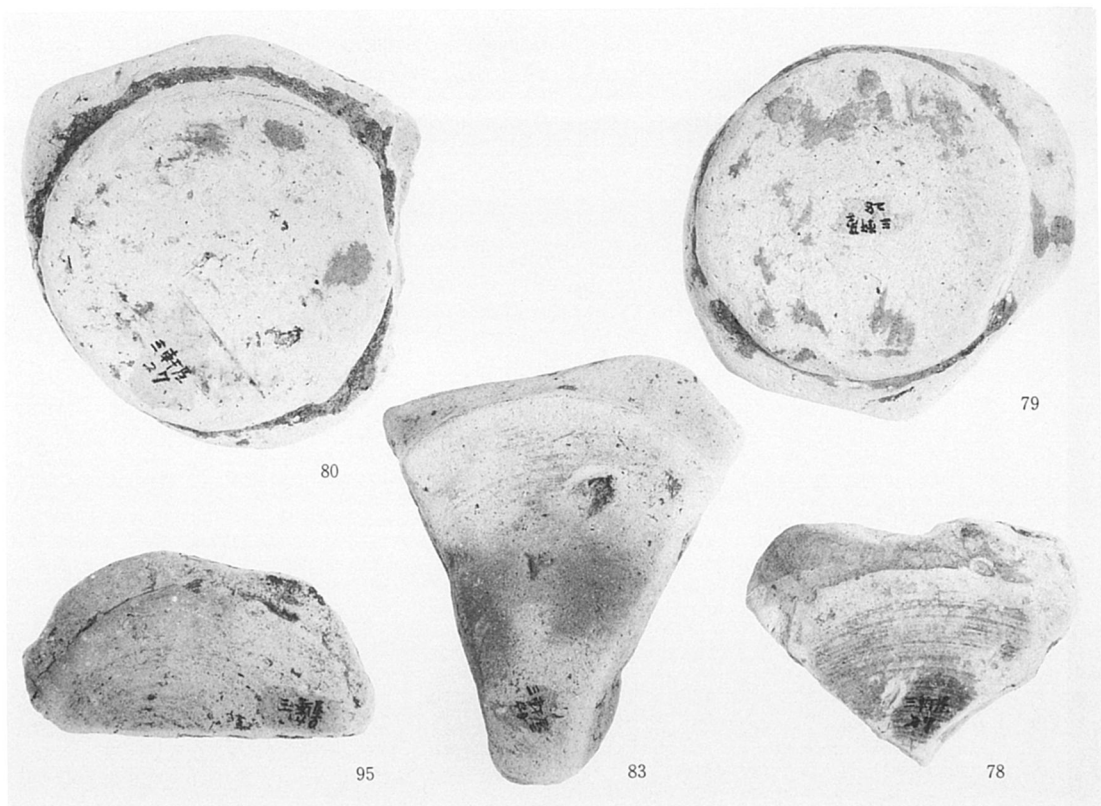


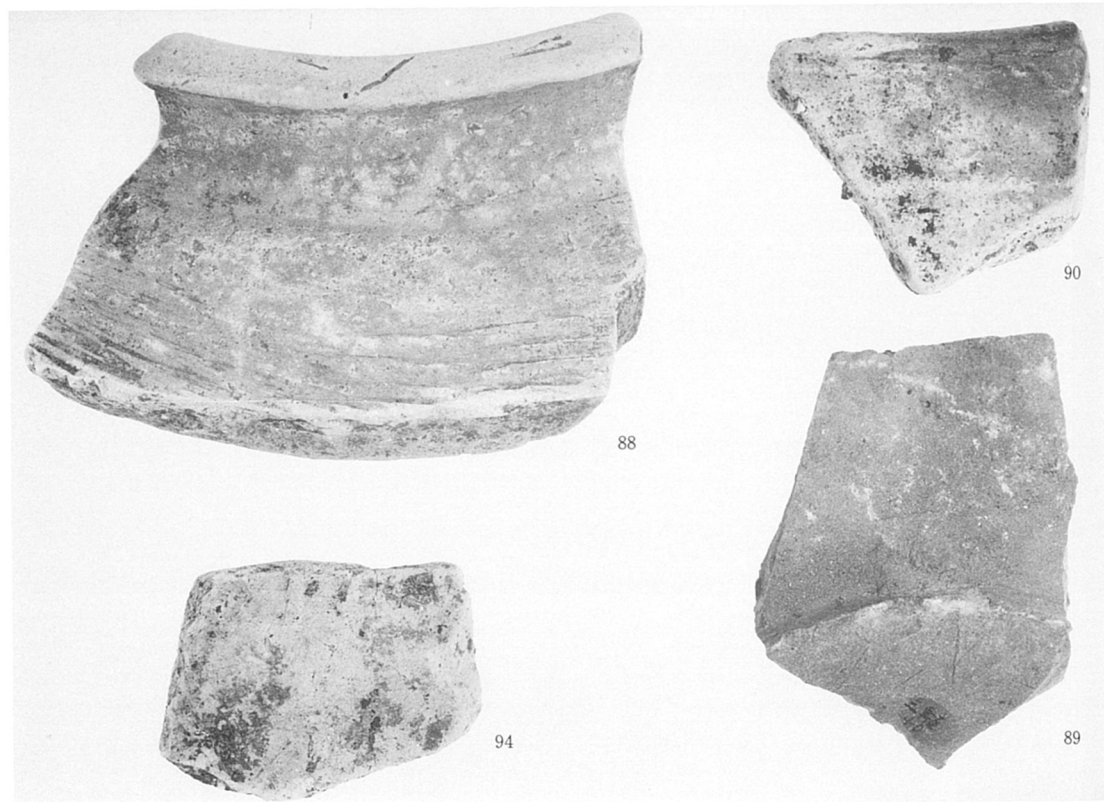
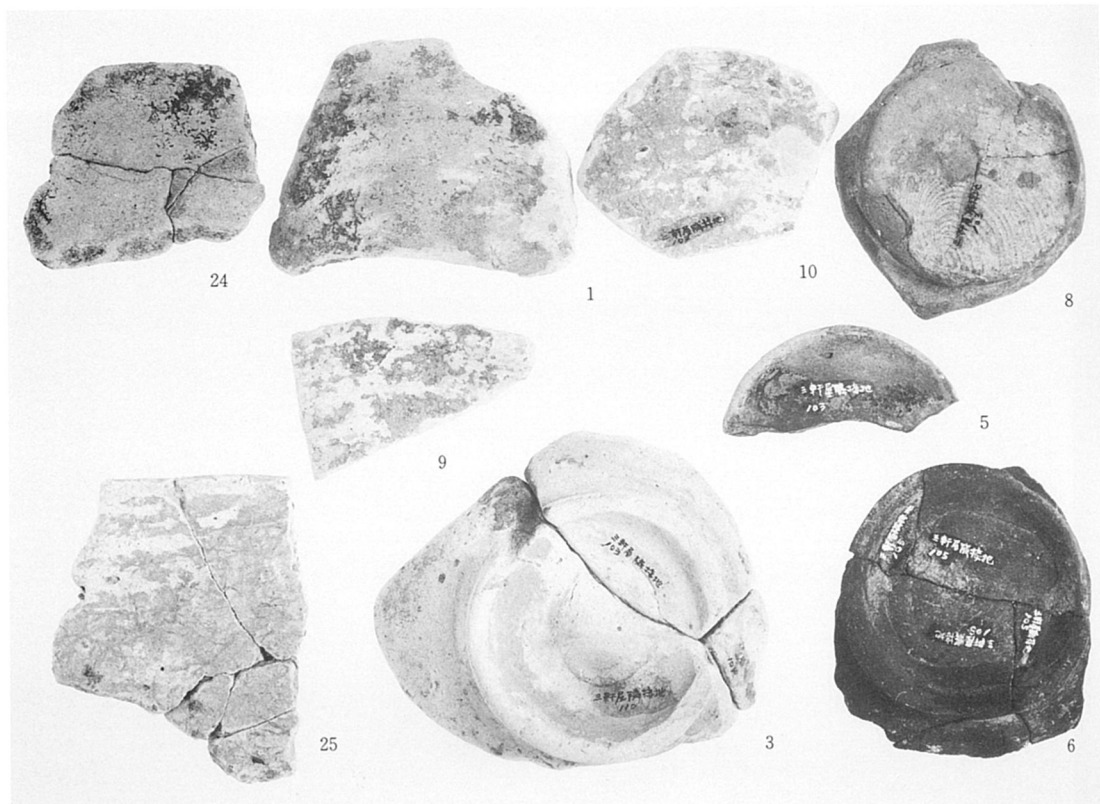
48

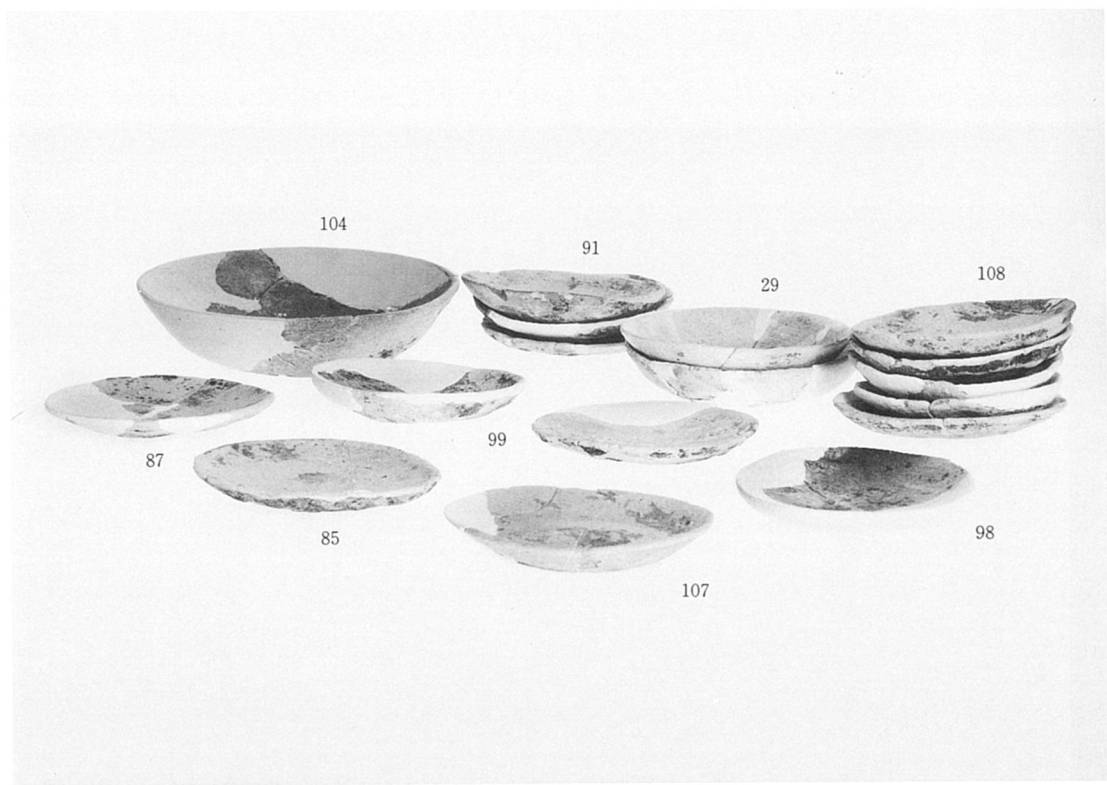


50

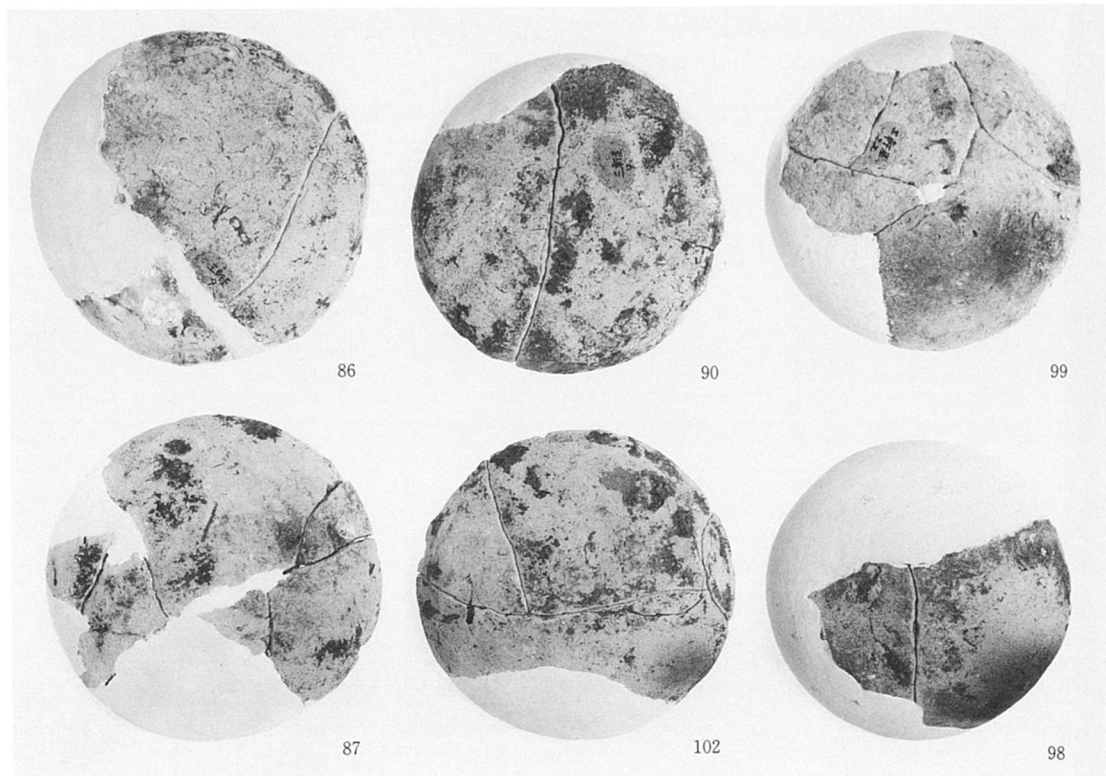








出土遺物集合写真



底部調整写真

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第47輯

三軒屋遺跡

空港連絡道路代替地造成事業に伴う発掘調査報告書

1989年12月25日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所